ISSN　1344-5715

Bulletin of Tokyo Kasei Gakun University Library

東京家政学院大学 図書館報

平成25年3月8日　第59号

発行者　東京家政学院大学
附属図書館
〒194-0292 東京都町田市
相原町2600
電　話　042(782)9815
印刷所　(株)栄文舎印刷所

「バーチャル・レファレンス／マイ・ライブラリー」のすすめ

田中　清章

数年前、アメリカのカリフォルニア州にあるカリフォルニア大学バークレー校環境設計大学院に行っている悪友に久しぶりに再会するためサンフランシスコを訪れ、大学院や学部のITを駆使した授業を体験することができた。カリフォルニア大学は、バークレー校を旗艦校とした10校で構成される州立大学群であるが、各キャンパスはそれぞれ独立した別の大学であるため、カリフォルニア大学という大学が単体で存在する訳ではない。

当時の私は、附属図書館長を拝命したばかりの素人で、その役割について何もわからない状況であったため、アメリカ最先端の図書館を視察する丁度良い機会だと友人に相談すると、ここよりカリフォルニア大学ロサンゼルス校(所謂、UCLA)のシンボルである通称パウエル図書館（1944年に図書館長に任命されたローレンス・パウエルに因む）が歴史的にも古く群を抜いた有名な建物でもあるとのことだったので、Eメールで紹介してもらった。

UCLAは、ロサンゼルスの中心街から約15㎞ほど離れたウエストウッドにあり、2012年現在、約4千人の職員と約3万7千人の学生が在籍している。その図書館群は、あわせて800万冊以上（本学は、ようやく平成24年度に30万冊に到達した）の蔵書数を誇り、全米の教育・研究機関中11位にランクされている。パウエル図書館は、建築家George W・Kelhamがデザインし、1929年ミラノにあるサンタンブロージョ聖堂（ロマネスク様式）をモデルとして建設されたらしい。また、世界屈指の綺麗すぎる図書館にも挙げられ、UCLAのシンボルとしてアイコンの一つと認証されている。ところが訪問してみると、歴史があるという触れ込みなので、古色蒼然とし重厚な図書館との私のイメージは脆くもエントランスホールで打ち砕かれた。エントランスはテレビドラマの撮影が行われていたり、ちょうど定期試験期間中であったため、図書館に泊り込み勉強する学生（試験期間中は24時間の利用が可能）、スタバのコーヒーを飲みながら館内の各所で歓談している自由闊達な姿が見られ、日本のそれとは大いに違っていると感嘆した。しかし、その飲食などの運用システムについては、明確にそのポリシーが決められており、野放しの状況ではないとの説明であった。また、職員は教員の身分を有し、学位は修士以上、博士を有する職員も希ではないことをアピールされた。また、1990年代から始まったバーチャルレファレンス（電子メールレファレンス、デジタルレファレンスなど）が確実に運用されていて更なる進歩的な試みが行われ、その内容の充実が図られていた。

日本の大学図書館は、「大学設置基準」の第8章第36条と第38条第1項に設置が義務づけられている。本学の附属図書館は、2キャンパス制の導入により、町田と千代田三番町の2館で構成されるようになり、両キャンパス間の学生・教職員・地域住民の利用サービスの向上等をはかる必要が増大した。そこで、図書館員と利用者とのコミュニケーション、特に利用者の情報要求を把握するうえで最も必要な対応が電子的に行なえるバーチャルレファレンスである。すなわち、インターネットを通じて自分のよく使う情報源にすぐアクセスしたり、自分のニーズに合わせて選択的に自分だけのポータルサイトを作ることを実現することが、図書館を自分のものとして身近に感じ、愛し、気持ちよく利用することができるのではないか。これに関連して附属図書館ではWEBで入学から卒業までの図書館利用記録をマイ・ライブラリーに整理・記録・保管し、いつでも閲覧できるシステムを導入しているが、意外と知られていない。その利用記録は、自分の過去の勉学や研究の経緯や4年間の自己歴史を検証する生きたシステムである。こうしたシステムをさらに発展させ、図書館機能とIT技術の融合を図るべく今後の附属図書館の奮闘に期待したい。（附属図書館長）

第五十九号　目次

「バーチャル・レファレンス／マイ・ライブラリー」のすすめ　田中　清章
古書店のある街から
―本の読み方いろいろ―　中町芙佐子
本の周辺　『新社会老年学　シニアライフのゆくえ』　鈴木知佐子
『大江文庫所蔵 島田勇雄旧蔵書目録』を刊行して　関原　暁子
本の周辺　『猫川柳』　大和田　寛
本学教員寄贈図書紹介
外国語絵本展　森　朋子
図書館との思い出　馬場　修
資料紹介
『野外教育入門シリーズ　野外教育の理論と実践』　金子　和正

資料の紹介

『野外教育入門シリーズ　野外教育の理論と実践』

金子和正

星野敏男・金子和正監修
杏林書院　2011年－刊行中

大自然の中で子ども達に限らず私たちは思いっきり遊ぶことの楽しさを、元来本能として持っているものである。しかし、東日本大震災を境に日本の野外活動の勢いが低下した。予想だにしなかった天災に見舞われ、今自然体験活動は右肩下がりかもしれない。そんな中で、野外教育の重要性と必要性を今こそ日本に広める機会と考え「野外教育入門シリーズ」を５巻刊行した。（第５巻は本年春発刊予定）野外教育は、わが国には以前から存在した教育スタイルであるが、これを体系化した国はアメリカ合衆国である。この国は広大で豊かな自然環境をもち、また実際にそれを目の当たりにしないと想像のつかない国立公園を58も抱え、中でもヨセミテ国立公園は自然保護活動の世界的代表格に位置し、自然体験のメッカでもある。加えて毎年野外教育関係の学位論文も多く輩出されている。日本型野外教育が叫ばれて久しいが、日本はアメリカの野外教育の数年後を歩んでいると言われ続けている。そんな中で、大学とフィールドの両方で実際に活躍している研究者を選び、シリーズとしての刊行をした。第１巻から第５巻までは、以下のようなタイトルである。１.野外教育の理論と実践、２.安全管理と安全学習、３.水辺の野外教育、４.障害のある子どもの野外教育、５.野外教育と冒険教育（未刊）

日本の野外教育の特徴は、短い期間で何でもかんでもやってみたいということである。せいぜい２泊３日程度が最も一般的であるが、この中で多くのプログラムを子ども達に体験させたいと願うため、子ども達はむしろ消化不良をおこし、終わってから野外体験は「面白いけども、１回経験すればもう十分」といった感想が多く聞かれることとなる。主催者サイドから見れば、貴重なことを、いろいろと体験させたいと考えているのであろう。また実施期間中のケガや危機管理といったリスクマネジメントは、大変な時間をとり準備されなくてはならない。野外体験は事故があるとメディアから面白おかしく取り上げられ、非常に厳しい状況に立たされる。本シリーズで著した「野外教育における　安全管理と安全学習」は時を得たように売れ行きを伸ばしている。これまで徹底的に野外教育と安全について安全管理と安全教育の両面から述べられた類書がなかったことが上げられている。また、先の大震災後の状況も相まっているのかもしれない。

近年の野外教育の特徴はホリスティック教育における有効な教育方法の１つとなり得るということも指摘されている。1998年に第15期中央教育審議会の第一次答申において、青少年と野外教育の必要性が叫ばれ「生きる力」の育成こそ野外教育で達成されるものであるとも示唆され、この年は全国的野外教育・自然体験ブームの到来の幕開けでもあった。その後、日本には4,000を越える自然体験を標榜する自然学校や、プロの野外体験の指導者が必要と言われ、実際の数もそれに近い値になってきたところでもあった。野外教育は一般的にキャンプがその代表として捉えられ、キャンプに理論が必要なのかと指摘する人たちも存在する。キャンプは野外教育の目的を達成するための手段の一つであり、方法論の一つでもある。野外教育は学校の中で行うことができない、むしろ野外で行った方が望ましい教育なのである。Outdoor Educationのdoorは教室のドアであるとも言われている。2013年文部科学省は「小学校長期自然体験支援プログラム」を開始することを決めている。本シリーズは学校教育関係者が長期の自然体験のプログラムを考えるときに大きな手助けとなると自負している。また、本シリーズの中の「障がいのある子どもの野外教育」は、これまで障がいをもつ子どもにとって、野外活動はしたくてもできない、あるいは全く遠い存在であったものを、今後前進させていくものと考えている。長い夏休みや春休みに子どもをキャンプに預け、保護者がわずかな休息とキャンプでの子ども達の成長を願うデスパイト・ケア的な方向も日本では今後話題になってくるだろう。本シリーズにおいては、あまりに早く発展していく我々の生活環境と、それに追いつかない人間の心のありようを示唆している。時間があるときに是非シリーズを手にとり、なぜ人は時々自然の中の不自由が予測できる生活をしたくなるのかを一緒に考えて欲しい。

最後に本学の健康・スポーツ演習の集中授業のキャンプ実習とウインタースポーツ実習（スキー・スノーボード）参加希望者は、ここ３年間、毎年250名を越えている現状をお知らせして本稿を終わりたい。

（児童学科　教授）

古書店のある街から
―本の読み方いろいろ―

中町　芙佐子

電子書籍は便利だが

電子書籍が生活に入り込んできて、読書や書店のあり方が大きく変化してきている。通勤電車でも液晶画面で読書している人が珍しくなくなった。その一方で文庫本を手にしている人も減らず、果たして電子書籍スタイルは日本に定着していくのであろうか。電子書籍の到来は出版業界の革命期ととらえる人が強調する利便性は、狭い自分の部屋に書棚を持つ必要がなくなり、インターネット上の本棚や図書館を利用し端末を通していつどこでも蔵書のすべてを読めることである。

それでも私自身はやっぱり本を手にして読みたい。待ち望んでいた新刊本や古書店で見つけた本は手元に置き読みたい時に何時でも取り出せるようにしたいし、新刊本のシャレた装丁を見ると著者や編集者になにやら個人的なつながりを感じて机の上においてしばし眺めたいと思う。

では新聞はどうだろうか。昨今は電子版が浸透し、海外にいてもその日の最新版を電子画面で見ることができる。新聞は本とは違い、日々刻々変化する出来事を迅速に報道するというのが目的であるので紙ベースでなくとも良く、現にアメリカの大手新聞ニューヨークタイムズ紙でも購読者数は電子版が紙媒体を抜いている。日本の場合は多少事情が違い、日本経済新聞を例にとると、毎月の購読料に1,000円プラスすれば電子版をも購読できる、いわゆる抱き合わせ方式を取り、双方の購読者を逃がさないようにしているため現在のところ電子版が紙媒体を侵食していない。

電子版新聞が生活に入り込んできた魅力のひとつは、読みたいときにパソコンやスマートフォンで新聞を呼び出して最新の社会情勢を入手できるだけでなく、それに関連する過去の記事をアーカイブ検索機能から引っ張り出せることである。また紙媒体の新聞だと興味のある記事を切り抜き保存しなければならないが、電子版ではパソコン上で保存でき、ハサミも要らず作業時間もかからなく保管場所も無用である。利便性を考えると明らかに電子版は優位に立つ。だからといって電子版だけで事足るかというと、どうもそれでは心もとない。新聞を手にとり読む、読書の途中で読みかけであった前の記事を読み返す、あるいは新聞を広げて見出しだけを拾うという、目で追い、実際に紙に触れる、という二つの感覚を使って読むので記憶に残りやすく、印刷物は捨てがたい。

書店が変わるのであろうか

では、電子書籍は書店のあり方を変えるであろうか。現に街の書店が年々減少しているといわれている。しかし、幸いにも私が住んでいる早稲田界隈は新刊書店はいうに及ばず古書店も多く、神田神保町に次ぐ日本第二の古書店街がある。古書店が並んでいるのは早稲田通り。地下鉄東西線の早稲田駅から早稲田通りを高田馬場駅のゆっくり歩いて片道20分ほど歩くと明治通りと交差するが、その間の道の両サイドに24軒ほどの古書店がある。わき道にも2、3軒はある。多くの店は店頭台を出し文庫本や新書を1冊100円、2冊100円などで並べる。運良く読みたかった本で絶版本になったものが見つかることもある。古書店がかもし出す時間が止まったような雰囲気は人をほっとさせる。

古書店の殆どは間口が狭い。店の中に入ると奥のほうまで天井高く積み上げられ、かなり大雑把に分類された本がところ狭しと置かれている。神田神保町のように専門店が並んでいるというより、なんでもありという古書店が多く、早稲田大との関係もあって演劇や古い映画の雑誌も結構ある。店の奥で黙って座っている店主はどんなに長くいても追い出さない。スーパーの帰りにちょっと立ち寄り、古書が積まれている狭い通路で時間を過ごせる普段着姿での本の付き合いは捨てがたい。

注：早稲田古書店街連合会のHPの「早稲田古書店街MAP」を使い、現在営業している新刊書店と古書店をチェック、かつマップにない新しい店を加えた。

2011年、三上 延の『ビブリア古書堂の事件手帖』が本屋大賞にノミネートされ、ミリオンセラーになった。それもあろうか、昨今古書店や古書が元気であるように見える。早稲田通りの古書店も店を覗く中高年に混じって大学の行き帰りに立ち寄る学生も見られるようになった。もっとも『ビブリア古書堂の事件手帖』の舞台はシャレた鎌倉であり、早稲田通りの古書店がモデルでない。

この本はシリーズが1部から3部まであり、古書に関して並外れた知識を持つものの極度の人見知りである古書店の店主・栞子が、客が持ち込む古書にまつわる謎を解いていくミステリーである。本の語り手は、小学生の頃の些細ないたずらが原因で活字を見ると体調が悪くなる青年である。読書とは縁遠い人生を送ってきたがひょんなきっかけでビブリア古書堂を手伝い、謎解きの手助けをする。本嫌いが本に惹かれていくところが人気の秘密なのだろう。装丁もアニメ世代の心をひきつけるもので、軽いタッチでありながら古典に読者を誘うという形をとっていて物知りにもなれる。

あってほしい書店の姿

早稲田通りには古書店だけでなく、小振りの街の本屋さんも数店あるし、その他専門書をもっぱらとする店と比較的広いスペースをもつ全国展開の書店がある。専門書を扱う店は夕方に早々と閉めるが、そのほかの店は夜9時、10時まで店を開けており、私も夜「あの本を読んでみたい」と急に思い立ち店に駆けつけたことも何度かあって、お目当ての本が見つかったときは本屋の近くに住んでいることを本当に有り難く思った。早稲田に住んでいてもう一つ良いことは、気軽に早稲田大学生協の書籍部を利用できることである。自宅から徒歩5分の生協書籍部に行くと学生層がどんなジャンルの本に興味があるかがよく分かる。たとえば難解な本の脇に漫画仕立ての解説本があるし、文庫本でもコミックなどが古典と並んであり、硬軟取り揃えて本に手を伸ばせるようにしてある。

このように身近に書店がある生活をしているのだが、物足らないことが一つある。本を売ることに熱心で平積みにして目に留まるようにしたり、売れ筋を書いた貼り紙にして客の気持を引くのは良いのだが、ゆっくりと本を読める空間がない。最大手の紀伊国屋に行っても同様である。改装した丸善では、窓側に椅子を置き座って読書ができるスペースを造っているが、それは買った後の本をそこで読めるということで、書棚にある本をではない。しかし、書棚の本を読むことができる書店が現ある。たとえばアメリカのBarnes & Noble書店。

ニューヨークに行くと必ず立ち寄るのがこの書店である。ニューヨーク大学の学生で大学内の生協でアルバイトをしていた創業者が自分でやった方がうまくいくと考え、小さな学生向けの書店をオープンしたのがきっかけだという。優れたサービスと知識豊かなスタッフで評判となり、店舗を拡大した。

訪れていつも感心するのは、店内の書棚からでも本を取り出し、その近くの床に座って自由にしかも時間を気にせずに読めるということである。長時間座って読んでいても店員が注意するわけでもなし、むしろそれ自体が容認されているふしがある。まるで図書館である。子ども向けの本のコーナーでは可愛らしいテーブルと椅子があり、売り物の本を何冊かを運んできて親子で読んでいることも珍しくない。私などは結構セコイので、売り物が汚れて価値が下がるのではないか、と思うのだが。むしろ、これこそが優れたサービスの一つなのだろう。ここに載せた写真は数年前にマンハッタンのBarnes & Nobleを訪れたときのものである。陽だまりのコーナーに孫であろうか年配の女性が幼い女の子に絵本を読んでやっていた。印象派の絵にもなるような光景で、お願いをして写真を撮らせてもらったものである。

日本でも、このような光景が当たり前のようになって、ゆっくりと子どもとともに本を読みきかせる書店ができて欲しいと思う。毎日の生活が忙しく時間を惜しんで、効率よく本を読みたい層には電子書籍を、そして、次世代の子どもと肩を寄せ合ってぬくもりとともに時間を過ごしたい人のために、売ることだけを目的にするのでなく読書ができる空間を提供する心意気のある書店がほしい。

（人間福祉学科　教授）

本の周辺

「新社会老年学　シニアライフのゆくえ」

鈴木知佐子

古谷野亘　安藤孝敏編著
(株)ワールドプランニング
2003

本書は老年学という学問の切り口から広く高齢者観を再考し、日本社会が既に迎えている超高齢社会の在り方に多くの視座を与えてくれる一冊です。高齢者介護の教育に携わる中で、高齢者を弱者としてみることへの抵抗が強かった私は、老年学という切り口から高齢者への認識を新たにするきっかけを作ってくれた本でもあります。

しかしながら、高齢者の介護問題は、日本の家族社会の変化や女性の社会進出等多様なくらしの変化の中で従来のように家族が介護を担うことへの限界があり、そのために介護の社会化を進める上ではこれまでの高齢者政策は非常に重要な課題であることは間違いありません。まだまだ、介護保険のはざまにあり、介護難民という言葉さえ生まれるほど介護問題は深刻な課題を抱えています。

今回はそれらの介護問題とは別に、本書が示す内容を参考に、これからの日本社会全体を見据えた場合の高齢社会をどういう方向に導くことが活力ある高齢社会を構築していく事になるのかを考えてみたいと思います。

私は他の大学で高齢社会学という科目を担当していますが、学生は殆どが社会人であることから学生たちの持つ高齢者観を聞く機会があります。その多くが高齢者に対する否定的な要素を挙げる学生が多いのですが、実際の高齢者自身の高齢者意識や社会貢献に参加している実態を紹介すると、高齢者へのイメージを180度転換して、学生たち自身が変化していくのが見て取れます。

実際、現在の80歳代の高齢者は、高度経済成長期を働き盛りである30代に経験した世代であり、教育や年金の恩恵を受け、経済的にも比較的安定した世代といえます。従って、従来の「老人」つまり、全ての活動から「隠居」して暮らす高齢者の姿ではなく、まったく新しいライフスタイルを持った人々です。さらに、2007年問題で新聞や雑誌に大きく取り上げられた団塊世代（第一次ベビーブーマー）の人々が65歳を迎えた今日、高齢者のイメージはますます一変することが予測されます。

高齢者自身に何歳を高齢者として認識するかを問うても70歳～75歳が圧倒的に多く、その中でも徐々にではありますが75歳意識のほうが伸びています。就労意欲に至っては、長く低迷する経済情勢もありますが、生活を支える収入としての就労選択とは別に、専門技術を活かしたい。生きがいや健康のため等を動機として持つ人々が多く、世界と比較しても非常に高い就労意識を持っています。本書では首都圏に暮らす50～79歳の人の調査から「保守堅実型」「地元世話役型」「楽天行動型」「自己研鑽型」の４つのライフスタイルを分析しています。このうち楽天行動型と自己研鑽型は従来にない新しいライフスタイルの高齢者像であることを指摘しています。これは、高齢者自身のライフスタイルが画一的ではなく、個性的で自立した高齢者像を意味しています。一方では、人間関係のわずらわしさは避けたいと思う反面、世代間への抵抗も少なく、協調性や努力をおしみなくしていこうとする姿が証明されているのです。

超高齢社会である日本が、このような意識を高く持つ高齢者の知力や活力を地域における子育て、学童支援への参加による地域貢献に活かしていくことに加え、今、やっと始まった定年制の延長や高齢者のwork sharing制の導入など、高齢者の多様性を排除しない社会のあり方が、今後の日本の高齢社会をより成熟した社会として形成していくことにつながるのではないかと考えます。　（人間福祉学科　教授）

「大江文庫所蔵　島田勇雄旧蔵書目録」を刊行して

関原　暁子

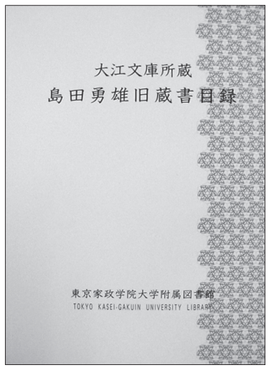
平成24年に「大江文庫所蔵　島田勇雄旧蔵書目録」を刊行することができました。作成には、私立大学図書館協会「和漢古典籍研究分科会」の指導者高橋良政先生はじめ、学内外の方々のご尽力を賜りました。

島田勇雄先生と大江文庫との出会いは、目録の巻末で触れましたが、島田先生のご経歴を、ここにご紹介いたします。

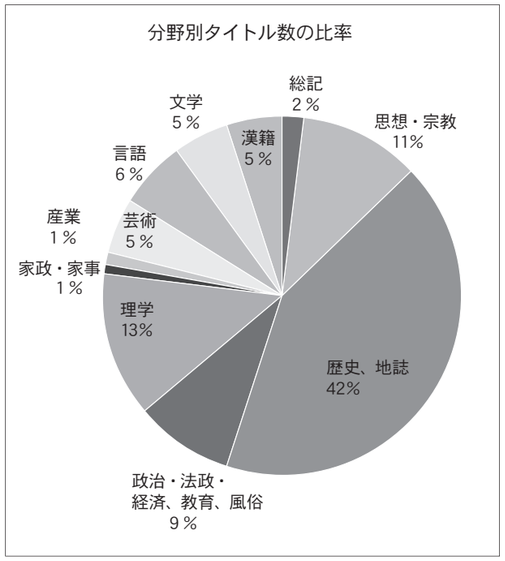
明治44年広島生まれ。昭和12年東京帝国大学国文科卒業。安田学園、立正大学を経て、昭和30年～50年神戸大学文学部教授、甲南女子大学教授を歴任。平成2年2月逝去。

ご専門は国語史。

本学が受入した資料の分野は巾広く、大江文庫には馴染みが少なかった分野まで、その数は約800冊に及びました。島田先生の学問について、先生の退官記念と古稀記念の「ことばの論文集」に甲斐睦朗氏、樋口元巳氏のお二人が詳しく述べられ、大きく纏めると「語学的修辞論の研究、好色一代男の研究、語彙論の位相的研究の三分野に分類すると共に、これらは統合された一つのものである。」と記しています。特に「近世語の語彙論の位相的研究」は、先人に開拓されていない領域で、そのため文献資料の探索・採集という一学者では到底不可能とされる難事業に取り組まれ、生活を極度に切り詰めて資料を購入され、他方では全国に散在する資料を足とカメラによって採集された。また、本草学という従来理科系統の学者の領域に属する資料を国語学的使用に耐えるものにするため、全国に散在する本草学資料を採集し、それらの伝本を比較検討することによって諸本を系統づけ、その上で本文を校合・解読を行ったことも紹介されています。



そのように集められた資料が、縁があって大江文庫に納められたことは、感慨深い思いです。お陰でコレクションは収集対象の異版が揃い、充実する結果になりました。目録の分野別タイトル数をグラフで表してみますと、歴史・地誌の分野が多いことが分かります。これは有職故実の写本類が多く占めています。



先生は「講座国語史3　語彙史」の中で「近代の語彙Ⅱ」を執筆されています。近世語の言語社会学的研究の追究に、遊里語や本草学・発展学だけでなく、仏書、さらに武者言葉を中心に兵法学用語資料の採集分析へと進まれ、兵法学用語資料を、武家礼式の諸流における言語研究とからませ、それらを広く伝授物というジャンルとして究明されました。小笠原流・伊勢流・武田流・吉良流等の武家礼式関係の各種伝書、犬追物・笠掛・流鏑馬等の騎射・歩射の謝礼一般、大和流等の弓道関係、大坪流の馬術関係、包丁道、香道等、連哥・俳諧の言葉寄せ等についても資料採集を試みられ、その多くが「島田勇雄旧蔵書目録」に納められています。

先生が積み重ねられた御仕事の中で、平凡社の東洋文庫に入っている次の書は、解題および校訂、訳注が施され、大江文庫の参考資料として、私たちは身近に活用し、学ばせていただいています。

東洋文庫（平凡社）

大諸礼集　全2巻　小笠原流礼法伝書

貞丈雑記　全4巻　伊勢流の武家故実

本朝食鑑　全5巻　日本の食物全般について品名を挙げ、その性質、能毒、滋味、食法などを説明

和漢三才図会　全18巻　江戸時代の絵入り百科事典

結びにあたり、本目録作成にご尽力いただいた関係者の方々に改めて御礼申し上げます。

参考資料

島田勇雄先生退官記念　ことばの論文集　1975　前田書店

島田勇雄先生古希記念　ことばの論文集　1981　明治書院

講座国語史3　語彙史　1971　大修館書店

（注）位相（いそう）　男女、年齢、職業、階層、地域、あるいは会話と文章などの違いによって、言葉の違いが現れる現象のこと。

（元図書館事務部長）

本の周辺

『猫川柳』

大和田　寛

８年前に出版され始め、現在猫カレンダーとしても人気の『猫川柳』。そこにはいわゆる「カワイイ！」とは一風異なり、個性的な写真と川柳の世界が広がります。その中から私の好きな句をいくつかご紹介します。

（家猫と飼い主）

寄り添えば　更に夢見る　眠り猫
無の境地　決して坊主にゃ　わかるまい
シンプルに　生きるのそんなに　大変か？
こんなにも　世話好きだったか　このオレは
ふられたの？　そんなにきつく　抱かないで
姉ちゃんが　嫁入りだとかで　家を去り
これ遊び？　それともDV　もしや愛!?
まあいいか　このまま一緒に　年取ろう
マタタビで　酔った酔ったよ　おっかさん
役立たず　それでも何かの　役に立ち

（野良猫人生）

年が明け　野良の子猫も　大人顔
母猫を　追いかけついでに　路地デビュー
あ、猫だ！　ハイ猫ですが　何ですか？
あの野郎　こんないいもの　食ってたか
この水も　慣れれば案外　飲めるもの
野良相手　いつもと違った　優し声

（猫と四季）

冬の朝　猫吐く息も　きんと冷え
月だけは　知ってる猫の　ランデブー
爪先で　ツクシつついて　春を知る
春の空　お前の模様と　同じ雲

辰巳出版　2009

他に、写真と合わせると思わず微笑んでしまう句はたくさんあります。実際の街中や飼い主宅で、「やらせ」抜きで、よくこんな場面に出会えたものだ、と感心を通り越して不思議ですらあるような写真の数々は、ユーモラスと同時に美しくもあり、句のできを凌ぐものも多くあります。

つれづれにページをめくっていると、日ごろの心の固着がほぐれていくのがよいところです。それはそのまま猫という生き物のよさでもあります。「近年、自分以外のものの存在を認めようとしない、そんな悲しい理由で人を傷つける人が増えています。そして、周囲はそれに気がつかず、とがめられることもない。そんな風潮が普通のことになってきています。常に相手の気持ちを想像してみる、さらにそのときの自分の気持ちを鑑みてみる。そういうことがもっと普通になれば、世の中の悲しいことは少しはなくなるんではないかなと思います。そんなちょっとしたことのきっかけに本書がなれればいいなと、勝手に思っています」という編者の後書きは、案外本気なのかもしれません。

（生活デザイン学科　准教授）

本学教員寄贈著書紹介

平成24年に寄贈を受けた本学教員の著作等を紹介します。ご寄贈いただきましてありがとうございました。今後も著作物出版の折にはご寄贈いただければ幸いです。

天野正子
現代「生活者」論　有志舎　2012

金澤良枝
知りたいことがよくわかる腎臓病教室　医歯薬出版　2009
腎臓病の食品成分表　女子栄養大学出版部　2012

江原絢子
食文化から社会がわかる！　青弓社　2009

西海賢二
東京都の民俗芸能　東京都教育委員会　2012
江戸の女人講と福祉活動　臨川書店　2012
筑波山と山岳信仰　崙書房出版　2012
コロスほか　論文多数

原口秀昭
圖解 RC 造建築入門　瞼譜出版　2011
建築的設備教室　瞼譜出版　2011
漫畫結構力學入門　積木文化　2009

藤井眞理子
被服管理学　朝倉書店　2012

吉川晴美
関係「臨床・教育」：気づく・学ぶ・活かす　不昧堂出版　2011

小林昭夫
テキスト子どもの病気　日本小児医事出版社　2012

黒岩貴
「他人支配」をやめると幸せになる　小学館　2010
いつも幸せな人の心のルール　フォレスト出版　2009

引いて、タイトルと文献名をメモしていきます。年度初めにはこの大変な作業を実験の合間を縫ってしたものでした。

実は作業が大変なことは大変なのですが、昭和の時代の大学では研究室にエアコンが無かったのです。特に夏場は実験が始まると研究室の室温が35℃近くになり暑くて居られたものではありませんでした。そこで夏場は文献検索を頻繁に行う事になるのです。早い話がエアコンのある涼しい図書館での検索というわけで、目的が半分避暑ということです。また、雑誌類のバックナンバーは閉架式の書庫にあり、書庫は通年22℃程度に保たれていました。ここもまた夏場は快適な場所でした。しかし文献を読んでいると眠くなってきます。これがくせ者で、長時間書庫に居てうたた寝などすると風邪を引いてしまいます。図書館は蔵書のために適切な温度、湿度を保っているわけですが、学生にとっても快適な環境でした。一方、複写目的で訪れた本郷にある大学の図書館ではスペースに余裕があり館内の机も大きく、異なった図書館のスタイルがあることにも気づきました。

図書館は閲覧環境が良いことが基本であると今でも考えていますが、本を読む、調べ物をするという行為が社会の変化につれて変わってきたようにも思います。旧来ですと背表紙（本の題名）につられて本を手に取る(目的外の本を読む)、さらには借りてしまうということがよくありましたが、電子ジャーナルがあり、本も電子化され、自炊されたものをタブレットで読むことも可能ですが、コンテンツが少ないため一般的な書籍以外ではまだまだ質、量ともに多くありません。これからますます電子化の方向に進み場所をとり重い本を持ち歩く煩雑さからは解放されるでしょうが、個人的には本の質感が好きなのでタブレットでの読書は図書館や書店に行けなくなるまで検索サービス以外には使わないでしょう。

原稿を書きながら、将来図書館がタブレットになるかもしれないなあと考えながら映画「The book of Eli：邦題ザ・ウォーカー」を思い出しました。

（健康栄養学科　教授）

外国語絵本展

森　朋子

外国語絵本展は、学生に外国語と外国文化に触れる機会を提供することを目的とし、2006年度から毎年大江記念図書館（町田キャンパス）で開催されている。2006年度から2010年度までは外国語教育検討分科会、2011年度からは国際交流センターの主催である。

英語、フランス語、ドイツ語、中国語、韓国語の絵本が各６冊ずつ展示され、言葉が分からなくても、キャプションで内容を楽しむことが可能だ。

また、今年度からは、大江記念図書館に加え、大江記念三番町図書館（千代田三番町キャンパス）においても開催されるようになった。スペースの関係で、町田キャンパスより小規模ではあるが、今年度は11月中旬から約1ヶ月間、5言語3冊ずつの絵本が新着図書コーナーに展示された。併設中学校・高等学校からの見学も可能である。

いずれのキャンパスでも図書館内の開催であるため、何名が実際に絵本を手に取ったのかは把握できないが、展示スペースに設置したアンケート用紙では、毎年貴重な意見や感想が寄せられている。「面白いと思った絵本」「日本語で読んでみたいと思った絵本」「展示されたもの以外に読んでみたい外国語の絵本」では、具体名が挙がることが多い。「外国語の絵本を見てどの様なことを感じたか」という質問には、これまで「絵にお国柄が出ている」「お国柄を感じる一方で、日本にもある話だと思うものがあり興味深い」「ヨーロッパの絵本は原色」などの感想が寄せられた。

千代田三番町キャンパスの
外国語絵本展の様子

また「絵本展全体についての意見」には、「さまざまな国の絵本を一度に見ることができて、とても面白い」「キャプションのあらすじがわかりやすい」「展示する絵本の冊数を増やして欲しい」「アジア圏の絵本をもう少し見てみたい」「ポップアップ絵本を多く」「外国で紹介されている日本の絵本も知りたい」などが寄せられ、外国語絵本への関心の高さが窺える。

リクエストの中で可能なものは今後積極的に取り入れ、より魅力的な外国語絵本展を展開していきたい。

心に残る絵本との出会いは、人生の宝物の一つである。また、外国との出会いは人生をより豊かにしてくれるものだ。外国語絵本展が、多くの学生達にとって、お気に入りの絵本を見つける場となり、外国語や外国文化へ興味を持つきっかけとなってくれることを願っている。

（現代家政学科　准教授）

図書館との思い出

馬場　修

図書館との思い出を執筆するにあたって、図書館の現状について少し資料にあたって見ました。資料の中に身近な項目があったので、いくつかクイズを作ってみました。

最初の問題、１位東京都、２位滋賀県、３位山梨県、４位奈良県、５位石川県です。さて、これは何の順位でしょう。

これは図書館の年間利用者数を示したものです。東京都は人口100人あたり234.99人、滋賀県は173.43人、3位山梨県は167.61人、奈良県が161.78人、石川県が160.4人、これだけの人たちが利用しているのです、東京都は一人が一年に約2.3回利用していることになります。利用者とは本の帯出者数のことで、１年間に本を借りた延べ人数を表しています。このデータでは図書の貸し出しを受けた人は重複していることから、ヘビーユーザーの存在がうかがえますし、逆に図書館を利用しなかった人の調査をすると興味ある結果が得られるのではないでしょうか。

次の問題、１位滋賀県、２位東京都、３位佐賀県、４位山口県、５位大阪府、さてこれは何の順位でしょう。

これは本の貸し出し冊数の順位で年間一人あたり何冊の本を借りているかを示したものです。１位の滋賀県は一人年間8.9冊を借りていることになり、東京都6.7冊、佐賀県6.7冊、山口県5.7冊で大阪府5.5冊の順となっています。利用者数と貸し出し数は必ずしも相関していませんが、滋賀県は多くの人が図書館を利用し、なかなか優秀な順位となっています。

最後の問題、１位山梨県、２位富山県、３位長野県、４位島根県、５位鳥取県、これは何の順位でしょうか。

これは図書館の蔵書数の順位です。人口一人あたりの冊数で示されています。１位の山梨県が5.97冊、富山県5.24冊、長野県5.19冊、島根県5.05冊、鳥取県が4.65冊の順となっています。蔵書の総数からすると東京都が4200万冊と最も多く、大阪府2016万冊、埼玉県2007万冊、千葉県1597万冊、愛知県1582万冊、の順となり人口の多い県が蔵書数も多い結果となっています。

図書館数

順位	都道府県	総　数	人口10万あたり
1	東京都	384	3.08
2	埼玉県	157	2.22
3	北海道	144	2.58
4	大阪府	141	1.63
5	千葉県	133	2.18
6	長野県	113	5.19
7	福岡県	106	2.11
8	兵庫県	99	1.77
9	静岡県	92	2.44
10	愛知県	91	1.27

皆さんの出身地がランクに入っていたでしょうか。

これら図書館に関する調査の数値からは人口の多寡が必ずしも利用者の数とはつながっていないことがわかります。また、蔵書数は人口の多い都府県で多いこともわかります。図書館数については別途、表に示しておきます。さすがに東京都が群を抜いて多いのがわかります。調査の方法にもよるでしょうが、よく利用する人と、あまり利用しない人間、すなわち利用者には偏りがあるようです。

図書館の利用者数、貸し出し数、蔵書数など普段利用している図書館の様々な順位は文部科学省の社会教育調査(2008年判) を参考にしました。

これまでの数値は公共図書館のデータでしたが、公共図書館以外の、小･中学校、高等学校、大学の図書館では利用の状況もかなり異なっているでしょう。ちなみに、大学図書館は学生一人あたりの蔵書は平均100冊、受入冊数2.0冊ですが、電子ジャーナルに関わる費用が大変増えてきています。

学生の皆さんは公立図書館、大学図書館を頻繁に利用していますか。

さて本題の図書館との思い出ですが、よく利用していたのは図書館とは呼べないとは思いますが、小学校の図書室が最初に浮かんできます。これは何故かというと、通っていた小学校では毎週の貸し出し冊数が決められていたからです。今でも理由がよくわからないのですが、一人の児童が本をたくさん借りてしまうと、他の人が読めなくなってしまうからではないかと勝手に想像していました。一週間に借りられる本の冊数が決まっていましたが、毎週、毎週枠一杯の本を借りて読んでいた記憶があります。小学校の図書館には必ずおいてある少年少女文学全集の、ファーブル昆虫記、誰でも読んだことがあると思いますがガリバー旅行記、ドリトル先生などを読んでいました。

中学、高校では、図書館を利用した記憶があまりなく、本は購入していたように思います。小遣いの中で、星新一、北杜夫、井伏鱒二、三島由紀夫、山本周五郎、モーパッサン、ルイス・キャロルの鏡の国のアリス、フロイトなどの本を買って読んでいました。中学高校では辞書辞典、参考書などを図書館で利用することが多いのでしょうが、幸いにして、理化学辞典、生物学辞典、広辞苑、大辞林などは家にあり、参考書なども家にあるもので間に合わせていました。

大学に入るとさすがに図書館に通う必要性が出てきました。辞書、辞典や専門書などは高価なので図書館での閲覧や、借りる事が多くなりました。学部時代は専門書の閲覧、貸し出しが主でしたが、大学院になると利用方法が少し変化してきました。大学図書館の本来の使い方なのかもしれませんが、レファレンスサービスが中心になっていきました。現在では文献検索はPubMedなど利用すればキーワードで多くの抄録を覧たりプリントも容易にできますが、当時はChemical abstracts、Biological abstractsを手作業で